

30 芸備瀬戸内海沿岸、島部の医史概観

江川 義雄

この地域における海上交通は神話・伝説時代から始まり、国際的には中国・朝鮮・東南アジア諸国との交渉史がある。近世以降になれば、国内交通は陸路の山陽道より海路の方がより重要であり、いわば「塩の道」として文化、経済、産業的影響が多く、或る面では先進地帯とすら考えられる。しかし医学史分野の研究や残された資料は少く、各地に僅かに口碑として伝えられているに過ぎない。当時の一般的史観は封建体制下の陸地部への記録に視点が据えられ、沿岸部、島部への配慮が乏しい。記録として参考になり、興味深いものとしては、異邦人として、この地帯を通過し、滞在した旅行者の記録である。その代表的なものは、長崎出島カピタンの江戸参府に随行したオランダ医官達の紀行記録である。ケンペル

(一六九〇)、ツンベルグ(一七七六)、ズーフ(二八一〇)、フィシャー(二八二二)、シーボルト(二八二八)などあげることができる。また寛永年間より始まる朝鮮通信使達の徳川幕府將軍への表敬団に随行した製述官達の記述した克明な記録がある。その内容は、当地方の蒲刈・三之瀬・軈などに残っている日本側記録、観察はすぐれている。

幕末に至っては、適塾の緒方洪庵が文久二年(一八六二)、五十三歳の時、中国四国地方を旅行し、弟子達とあい、觀光の合間には患者を診ている。その記録は「壬戌旅行日記」に記され、六十余名の人達とあい、洪庵の豊かな文才によりスケッチされている。文中には中国四国の沿岸部の医人達との再会も海路旅行ならではの果されなかつたであろう。

日本が近代化し、山陽道には道路網が整備され、更に鉄道開通により、これまでの海路の運んできた豊かさや文化的恩恵も次第に薄れつつ、かつ加速されていった。神武天皇の東征時に、天皇は安芸の埃の宮に七年間滞在し、諸神にその成功を祈った故事として、豊島の齋島、

御手洗の地名が残り、神功皇后の三韓行あり、倉橋島の鹿老渡かろうとはからに渡る処の地名で、大陸渡海の起点とされ芸陽の島々の大きい港は、古くから風待ち、潮待ちの港として賑わい、白雉元年（六五〇）には、この島で百済行きの造船が行われている。

中世になり対明貿易が開始されるにいたれば、船は大形化し、航路は沖合を航行し、更に時代が徳川に至れば、西廻り航路が開けて、瀬戸内海は裏日本・東北・北海道とその航路が開拓され、産業・経済の活発化と共に、文化の交流が見られ、下関・上ヶ関・尾道・竹原などにその繁栄が見られるのである。

貿易による交易は、伝染病の侵入をもたらし、その他の疾患の洗礼地は港であり、蒲刈・御手洗にその史実を知ることが出来る。

海路は陸路交通より物、人の移動が容易であることから、沿岸・島からの出身医家は、陸地出身医家に劣らず遠く京阪の地に遊学していることも特記すべき事であろう。

明治時代に入ると、呉浦には海軍鎮守府が設けられる

に至り、明治一九年九月一八日海軍軍医大監豊住秀堅が海軍建築委員として来呉した。明治二〇年一月五日、秀堅は会長に推薦され、呉を中心に居住する四〇余名の医師をもつて構成された「明めい廿じゅう会」が発足した。その規約は、医風を改良し、学術を研究することを目的として、呉・安芸郡地区に定着した。これらの先駆的活動はやがて芸備医学会へと発展し、明治三八年二月、明廿会は芸備医学会呉部会へと発展的に解消した。

明治以前には予想されなかった小さい港町が軍港として発展し、西の軍都・広島と同じく衛生部の卓越した軍医達の指導協力により、地域医療への寄与と医師へ近代的自覚と学術的組織化を促進させたことは大きい功績といえるであろう。